

チブサン古墳

色鮮やかな幾何学模様や人間のような形が、古墳時代（紀元後 300 – 538）から始まったチブサン古墳の内室を装飾している。「古墳」とは、「古代の埋葬塚」を意味し、この時代に支配階級のために建てられた墓を指す。

この埋葬塚を外から見ると、全長約 55 メートルで、小さな丘が 2 つ並んでいるようである。埋葬塚には、4 メートル近くまで岩が積み上げられてできた玄室がある。

古代のシンボル、色彩

玄室は巨大な石板で建てられており、その大きさは幅 2.3 メートル、奥行き 0.9 メートル、高さ 1.45 メートルにおよぶ。これらの石板は鮮やかな赤、白、黒で幾何学模様が描かれている。赤色には、酸化鉄が豊富な焼土が使われており、白色と黒色には、粘土とマンガンが使われている。たくさんの三角形の形により、目が描かれている。考古学者は、これらは悪霊を避けることを意図していたのであろうと考えている。玄室の壁の中心には、2 つの白い円と黒い点が描かれている。これらの形は、これまで代わる代わる、星、鏡または乳房であると説明されてきた。

右側の隣接する石板には、手をいっぱいに広げた人間のような形をしたものがあり、その頭には王冠のように見えるものがのっている。その上には、7 つの円形が描かれている。これらの円形は北斗七星の 7 つの星を表していると考えられる。

近隣の歴史の痕跡

玄室の内部に遺体や出土品は見受けられなかったことが分かっている。しかしながら、人間の形をした、高さ 150 センチ、幅 80 センチの石像彫刻がこの近くで発見された。おそらく墓を守るためにそこに設置されたのであろう。実物は東京国立博物館が所蔵しており、この埋葬塚があった場所にはレプリカを展示している。

チブサン古墳は、山鹿の西方、車で 10 分足らずのところにある。アクセス道は狭く、大型車だと現地まで簡単にたどり着くことができない。外部と、内室の石棺の屋外再現物は、いつでも見学可能である。しかしながら、内部を見学する場合は事前の予約が必要となる。また、埋葬塚の一番奥の室は、窓越しの見学のみとなっている。

この近くの別の場所には、岩だらけの丘陵の斜面の一面に掘られた一続きになった 61 の室がある。これらは鍋田横穴と呼ばれている。これらも、古墳時代を始まりとし、墓としての役割をしていたであろう。

う。埋葬塚について詳しく知りたい場合、山鹿の熊本県立装飾古墳館でこの文化的慣習についての詳細な情報、豊富な展示を見ることができる。